# 第九回　諸橋轍次記念　漢字文化理解力検定　解答・解説

**【問題Ⅰ】**（小計45点）

**問1**【読み書き】①＝司-る（掌-る・主-る・典-る・宰-るも可）
②＝然-るに（而-るにも可）　③＝政客　④＝いわゆる　⑤＝弊害
⑥＝取捨　⑦＝かん-する（けん-する・げん-するも可）　⑧＝かいぎゃく
⑨＝嘲笑（調笑も可）　⑩＝ごびゅう　（各2点）

**問2**【音訳】エ　（2点）

**問3**【故事成語】ウ　（2点）

**問4**【部首】ひ　（2点）

**問5**【画数】11画（十一画・一一画も可）　（2点）

**問6**【故事成語】ア　（2点）

**問7**【熟語】F「意表」―エ　G「毫も」―ウ　（各2点）

**問8**【六書】ウ　（2点）

**問9**【漢詩文】ア　（2点）

**問10**【慣用句】顔が青ざめる（6字）　（3点）

**問11**【熟語】ア　（2点）

**問12**【字源】イ　（2点）

■**解説**　**問2**　ア「倫敦（London）」・イ「布哇（Hawaii）」・ウ「巴里（Paris）」は、いずれも音訳。エ「聖林（Hollywood）」は、holly を「聖」、wood を「林」とした意訳。ただし、holly はヒイラギという植物で、これを holy（聖なる）と誤解したことから「聖林」を当てたといわれている。

**問3**　「守株（株を守る、株を守る）」は『韓非子』にある故事。昔、ウサギが木の切り株に頭をぶつけて死んだのを見た宋の国の農夫が、それ以来畑仕事をやめて切り株の番をして暮らし、国中の笑い物になったという話から、古い習慣を固守して進歩のないことをいう。ア「推敲」は、『唐詩紀事』などにある故事。詩文を作る際に、字句や表現をよく練ること。イ「蛇足」は、『戦国策』にある故事。無くてもよい無駄なもののこと。エ「五十歩百歩」は、『孟子』にある故事。本質的に違いがないことのたとえ。

**問6**　道理に合わないことを無理にこじつけるたとえ。『武』は戈を止めると書く。武力を抑止するのが武道だ。」のようなもっともらしい説明は、郢書燕説の典型。「武」は、戈を止めるではなく、戈を持って戦いに行くの意。※武は、会意。「戈（ほこ）と止（あし）」で、戈をもって足で堂々と前進するさま。ない物を求めてがむしゃらに進む意を含む。▽「春秋左氏伝」宣公十二年に「戈を止むるを武となす」とあるのは誤り。（『漢字源』）

**問7**　「意表」は、考えに入れていないこと、思いの外、意外。「毫も」は、下に打消を伴って、いささか、少しも。「毫」は、動物の細い毛の意。

**問8**　「会意」とは、複数の構成要素の意味を組み合わせて新しい意味の一字を作る造字法のこと。「明・伐・榊・襞」。ア「日・木・水・車」象形文字。イ「上・下・本・末」指示文字。エ「河・到・筒・褒」形声文字。

**問9**　「赤壁の賦」は、北宋の蘇軾の作。湖北省黄岡県の城外に遊んだ蘇軾が、誤ってここを曹操が破れた古戦場「赤壁」と考え、前後二編の「赤壁の賦」を作った。イ「朋党論」北宋の欧陽脩の作。ウ「雑説」中唐の韓愈の作。エ「蛇を捕ふる者の説」中唐の柳宗元の作。韓愈、柳宗元、欧陽脩、蘇軾に王安石、曾鞏、蘇洵、蘇轍を加えた八人を「唐宋八大家」と称する。

**問10**　顔が青くなる（6字）、元気がなくなる（7字）、手も足も出ない（7字）、血の気が引く（6字）なども可。「顔色」は、心情の変化が現れた顔の様子。「がんしょく」と読みたい。

**問11**　「鳩首」は、頭をあつめる。相談などをする時に互いに頭を近づけあつめること。イ「鳩杖」は、頭に鳩の飾りのある箸。また、鳩の飾りのある杖。ハトは飲食する時にむせないということから、老人がむせないことを祈る意を寓している。ウ「鳩巣」は、ハトの巣。ハトは巣を作ることが下手であることから、転じて、粗末なすみか。エ「鳩尾」は、みずおち。胸と腹との間のくぼんだところ。

**問12**　「右文」は、漢字の右半分、旁の部分のこと。「右文説」は、形声文字で、本来音を表す「右文」が、その文字の基本的な意味をも表すとする説。たとえば、清・精・晴・睛などが、「青（すみきった）」という意味を共有すると説くが、この説には限界がある。蘇軾が王安石の説く「滑」や「鳩」の字源を論破した話は、『鶴林玉露』や『警世通言』にある。阿辻哲次『漢字の字源』（講談社、一九九四年）が参考になる。ア「五行説」木・火・土・金・水の「五行」の消長によって天地の変異を説明する。ウ「音義説」同音の語によって語源を説く。エ「性霊説」漢詩で、心情を自由に発露することを要諦とする説。

（塚田勝郎）

**【問題Ⅱ】**（小計20点）

**問1**【誤字訂正】①＝侮→悔　②＝察→刷　③＝望→臨　（各2点）

**問2**【二字熟語の構造】①＝ウ　②＝エ　③＝ア　（各2点）

**問3**【類義の四字熟語】イ　（2点）

**問4**【故事成語】エ　（1点）

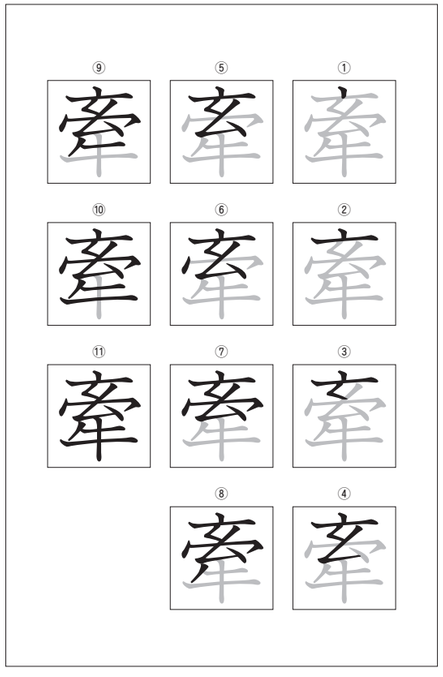
**問5**【漢籍の知識】孔子家語　（2点）

**問6**【万葉仮名】（1）＝こ　（1点）　（2）＝屋　（2点）

■**解説**　**問1**①「後悔」の「悔」は、「く（やむ）」と訓読みする漢字。心情に関する意味を持つ漢字なので、部首「忄（立心偏）」が付く。「亻（人偏）」の「侮」は、「あなど（る）」と訓読みする漢字。対人関係を表すので「亻」だ、と覚えるとよい。②「刷新」は、〝きれいさっぱり新しくする〟という意味。「刷」には、汚れなどを〝きれいに払い去る〟という意味がある。③〝見る〟ことを表す「望」は、「望遠鏡」のように〝遠くを見る〟という意味。「○○を望む」の形で用いるのが基本。一方、「○○にのぞむ」は、〝すぐそばに接する〟という意味で、漢字では「臨海工業地帯」などの「臨」を用いる。

**問2**　①ア「防災」は〝災いを防ぐ〟こと。イ「代案」は〝代わりの案〟。ウ「関与」は〝関わることと与（あずか）ること〟、「あずかる」とは〝関係する〟という意味。エ「非凡」は〝平〟凡に非ず〟。②ア「指定」は〝指して定める〟。イ「予定」は、〝予（あらかじ）め定める〟。ウ「内定」は〝内々に定める〟。エ「法定」は、〝法が定める〟。③ア「断裁」は〝紙などを断ち切る〟こと。「裁断」は、〝判断して決める〟という意味もあるが、〝紙や布などを切る〟という意味でも使われる。イ「牛乳」は〝牛の乳〟で、「乳牛」は〝乳を出す牛〟。ウ「虚空」は〝何もない空間〟で、「空虚」は〝中身がない〟こと。エ「辞世」は〝死を前にして残す詩歌〟だが、「世辞」はいわゆる「おせじ」で〝相手に気に入られるようなことば〟をいう。

**問3**　示された四字熟語の空欄を埋めると、「行雲流水」「深山幽谷」「旗幟鮮明」「千紫万紅」。「水」「山」「明」「紫」を並べ換えてできるのは「山紫水明」で、〝美しい山や水辺〟を意味する四字熟語。一方、選択肢のア「鏡花水月」は〝把握するのが難しい、芸術的な美しさ〟、イ「風光明媚」は〝自然の景色が明るく美しい〟こと、ウ「晴耕雨読」は〝自然と一体になった暮らし〟のた



**【問題Ⅲ】**（15点）

**問1【国字】**（1）＝ウ　（2）＝すけとうだら（すけそうだら、すけと　も可）（各3点）

**問2【国字・国訓】**ア・ウ（各3点）

**問3【崩し字】**候（3点）

**■解説　問1**　女房詞は、室町時代から宮中や院に仕える女房たちが使い始めた社会方言である。その一部は、今も用いられている。日本語学では、日本語史や位相語の研究において扱われてきた。女房詞でタラをユキと呼ぶのは、この字の旁からとも、身が白いところからとも考えられる。この字は、雪（旧字体は「雪」）が降る季節に旬を迎える点と白身魚である点から旁に「雪」が選ばれたものであろう。この旁は「冬」なども書かれた（鮗。別にコノシロに多く用いる）。「鰶」は「介党鱈」「助惣鱈」などとも書く。江戸時代に佐渡でスケトと読んで使われたことが判明している。

**問2**　「門」「閑」は国字とみなされることがあったが（後者は第三回の解説参照）、宋代頃に中国で現れた漢字であり、字書などの記述内容から中国由来の字義といえる。一方、「閊」は江戸時代頃に現れた国字である。力士の名に慣習として付ける「関」の用法は、相撲界からのことであるため国訓である。

**問3**　いわゆる候文体の書物や文書において、「～でございます」「～ます」という意味で使われた補助動詞の「さうらふ」に当てた「候」である。これは、日本で崩して書くことが進み、近世にはしばしばこのように書かれた。時には「丶」で済まされることさえもあった。

（笹原宏之）

**【問題Ⅳ】**（小計15点）

**問1【辞書の種別】**イ（3点）

**問2【字義】**イ（3点）

**問3【六書】**ウ（3点）

**問4【表記法】**反切注（反切・反切法も可）（3点）

**問5【韻書の読み方】**（例）同音字の数／同じ小韻の収録字数／變と同じ読みの字の数　など（3点）

**■解説　問1**　漢字の発音によって字を分類配列した辞書のことを、「韻書」と呼ぶ。代表的な韻書には『広韻』（宋・陳彭年ら撰、一〇〇八年）、『集韻』（宋・丁度ら撰、一〇三九年）などがある。ア「字書」は、部首によって漢字を配列し解説した辞書のこと。ウ「音義書」は、特定の経典に登場する、解釈が必要な字や語句に対して、原典での登場順に配列し解説する辞書のこと。エ「字様書」は、漢字の正しい字形や書写上の規範を示す書物のこと。オ「類書」は、多くの書物から記事や語句を抜き出して内容ごとに分類して集めた、百科事典的な書物のこと。

**問2**　「變」は「ショウ」と読み、「和らげる」の意味で、「變和」〈調和させる〉「變理」〈やわらげ、ととのえて国を治める〉などの語の一部として使われる。

**問3**　「会意」とは、複数の構成要素の意味を組み合わせて新しい意味の一字を作る造字法のこと。『説文解字』で成り立ちが「从ＡＢ」と示される字は、会意字である。『広韻』が引用する『説文解字』には「从言又炎」とあり、「言・又・炎」の三字の意味を合わせて「變」という字ができたと解説されている。

**問4**　古典中国での漢字の発音表記法には、主に反切法と直音法とがある。反切法とは、漢字二字を用いて発音を表記する方法で、「某某切（反）」の形式で表され、二字の発音を口の中ですり合わせることによって目的とする字の発音を導き出させるように字が選ばれている。

**問5**　『広韻』では同じ発音の字がまとめて掲出される。その同音字群の冒頭に置かれた字には音注が記され、字釈末に同音字の数が記される。「十六」は「變」を含む小韻の収録字数を表している。

（田中郁也）

**【問題Ⅴ】**（小計5点）

**問1【大漢和辞典】**ウ（1点）

**問2【大漢和辞典】**イ（1点）

**問3【大漢和辞典】**エ（1点）

**問4【業績】**ア（1点）

**問5【座右の銘】**行不由徑（徑）（1点）

**■解説　問1**　諸橋博士に漢和辞典の編纂を持ちかけたのは、大修館書店創業者の鈴木一平である。ア「岩波茂雄」は岩波書店、イ「野間清治」は講談社の創業者として知られる出版人である。エ「金田一京助」はアイヌ語研究に従事した言語学者で多くの辞書の編・監修者として知られる。オ「正宗敦夫」は『万葉集索引』『日本古典全集』などの刊行で知られる国文学者・歌人である。

**問2**　『大漢和辞典』に収録される見出し字数は約五万字で、一般的な机上漢和辞典の見出し字数がおよそ一万字程度であるところから見ても、その収録字数の多さがわかる。

**問3**　一九四三年には初版の第一巻が刊行されたが、その後戦災によって組版や資料を失った。戦後再度編纂に取りかかり、一九五五年に第一巻を刊行、一九六〇年に全十三巻が完成した。

**問4**　静嘉堂文庫は、三菱財閥の岩崎家が収集した古典籍や美術品などを収蔵する機関である。岩崎小弥太は、三菱財閥の第四代総帥で、静嘉堂文庫の発展にも尽力した人物。イ「渋沢栄一」は、「日本資本主義の父」とも呼ばれ日本の近代化に尽力した実業家。ウ「大倉喜八郎」は、大倉財閥を築いた実業家。エ「益田孝」は三井物産の創立に関わり、三井財閥の発展に貢献した実業家。オ「住友友純」は住友家第十五代当主。

**問5**　「行不由徑」（ゆくにこみちによらず）は、『論語』（雍也）にある言葉。「歩くのに安易なこみち（徑）を選ばず、まっすぐ大道を歩む」という意味の語句である。

（田中郁也）

とえ、エ「無為自然」は〝特に手を加えない、ありのままの状態〟。「山紫水明」と最も意味が近いのは、イ。

**問4**　ア「破天荒」は〝前例のないことをする〟ことで、『北夢瑣言』に出てくる故事から。中国のある地方は、中央政府の官吏登用試験（科挙）に合格者を出したことがないことから「天荒（自然のままの荒れ地）」と呼ばれていたが、初めて合格者が出た時にはその状態を「破った」と称されたことから。イ「登竜門」は〝出世につながるような、重要な試験やコンクールなど〟のたとえで、『後漢書』に出てくる故事から。「竜門」とは、黄河にある急流。そこを登り切った鯉は竜になると言われていた。後漢王朝の時代、ある有力な政治家と交友を結ぶことをたとえて、「竜門に登る」と呼んだという。ウ「白眼視」は、〝冷淡に接する〟ことで、『晋書』に出てくる故事。ある文人は、「青眼」と「白眼」を使い分けることができ、気に入らない人物と会う時には「白眼」を用いていたという話。エ「天王山」は〝勝敗や運命の分かれ目〟のこと。『太閤記』に出てくる話で、羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）が明智光秀と戦った際、この山を占領したことをきっかけに勝利を得たという。

**問5**　『論語』、『礼記』、『春秋』は、いずれも「四書五経」の一つ。『孔子家語』は孔子にまつわるエピソードを集めたものだが、後世の偽作説もあり、「四書五経」には含まれていない。

**問6**　掲げた歌は、『万葉集』一九巻四二九一番、大伴家持の一首。（1）万葉仮名の「許」に対応するひらがなを答える問題。和歌の文脈と、現在、一般的に使われている音読み「きょ」を考え合わせると、「こ」ではないかと推測できる。（2）「和（わ）」「我（が）」「度（ど）」などは、現在でも使われる音読み。「能（の）」「等（と）」「敝（へ）」は、音読み「のう」「とう」「へい」が縮まったもの。これらに対して、「屋」の音読みは「おく」で、「や」と読むのは訓読み。万葉仮名では音読みを用いるものが目立つ印象があるが、訓読みを使っているものも少なくない。

（円満字二郎）